



財団法人 田附興風会 医学研究所 北野病院

研究マインドを持って臨床する意味 豊富でレベルの高い指導医陣が魅力

北野病院は1925年、京都大学の中に設けられた財団法人田附興風会医学研究所に起源を発する。その後、大阪市から用地の提供を受け臨床医学研究を行う田附興風会北野病院となる。

臨床研修では長く京都大学を始めとした関西圏の大学病院から研修医を受け入れ、特に内科系専門医の育成では日本でも有数の教育病院として知られている。

研究的姿勢で臨む臨床研修の中身 選抜試験は英語力を重視

「医学研究所」、「京都大学医学部とともに」——北野病院の研修を紹介する上で、この2つの特徴は欠かせないだろう。

山岡義生院長は、「研究と言うと基礎研究を想像するかもしれませんが、この場合は“臨床研究”を指します。来た患者さんをさばっていくのではなく、いろいろな事実を検証した上で、エビデンスに基づいた医療を行う。そしてここが一番大切なのですが、当院には研修医に医療と医学を教えられる部長・副部長クラスの指導医が各科に揃っています。大学で内科の講師をしていた医師、海外の大学病院で学んだ医師がいるので、レベルの高い研修教育が可能なのです」と、説明する。医療を研修しながら、同時に医学も究める、それが北野病院での研修の魅力だという。

そのため、研修医採用試験で受験者に求めるレベルも高くなる。採用試験は筆記試験と面接試験の二段階で選抜するが、「筆記試験の配点の5割は英語」（山岡院長）だという。これは、「たとえ

ば当院の外科では研修医に指導する際に、『Surgeryのvol.135にこの症例について書いてあるから読んでおきなさい』といった指導が日常的に行われています。診療の合間にサッと読んで内容を理解できないと困る。英和辞典で単語の意味を調べながらでないとなんか理解できない研修医には、当院での研修には不向きです」（山岡院長）という理由からだ。但し、採用試験は筆記以外にも面接試験を課しており、「採用に当たっては、学生の志望動機や理想の高さなどをきちんと判断している」と糖尿病・内分泌センターの越山裕行部長はつけ加える。

もう一つの特徴、「京都大学医学部とともに」という標語は、設立の趣旨からすると当然かもしれないが、他大学の医学生にとっては戸惑う点かもしれない。特に北野病院は、初年度のマッチングで12名の定員のうち6名が京都大学出身者で埋まった。このあたりの事情について、越山部長は、「歴史的に京都大学と関連が深く、現在も京都大学病院の関連病院であることは事実です。しかし、選抜試験は非常に厳正かつ公平に

行っており、京都大学の学生に有利ということはありません。ただ、1年目は京都大学からの受験者が非常に多かったため、採用も京都大学が多くなった」と説明する。

医学と医療を極めた指導医陣 自由な風土と自己責任の原則

山岡院長が「もったいない」と言うのには理由がある。元々、山岡院長は2年前に北野病院に赴任するまで京都大学の教授として大学の臨床教育に携わっていた。新医師臨床研修のスタートと同時に北野病院に赴任してきたが、「北野病院に赴任してみたら、臨床教育のレベルが高くて驚いた」と山岡院長は言う。レベルが高い理由は、豊富な臨床例、指導医数、そして指導医の個々の質が高いためだ。「京都大学医学部の助教授・講師クラスあるいは臨床教授兼任の医師がここでは部長をしています。それぞれが専門分野の最先端を修得しており、年が近い分、若手の指導も上手です。そしてプライマリケアの症例が大学病院とは比べ物にならないくらい豊富です。指導医と症例が共に揃っていれば、そこで行われる研修も自然とレベルは高くなります」（山岡院長）。

各科で学んだ手技を救急で実践 知識をサポートする講義も開始

北野病院の臨床研修プログラムは基本的に厚生労働省の規定通り、但し、3ヶ月の外科を腹部外科2ヶ月、胸部外科1ヶ月に分けて、プライマリケアに必要な外科の手技を偏りなく研修させるといった心遣いをしている。

また、麻酔科は2ヶ月、救急は1ヶ月と麻酔科の研修期間が他の研修施設よ

りも若干長くなっている点にも特徴はある。「救急医療は救急研修期間だけでなく、2年間のスーパーローテート中、実際の当直で学んでもらいたい。コモンディーズの患者さんが昼間の救急研修中に必ず来るかという保証などありません。それよりも気管挿管や中心静脈などの手技を麻酔科研修中に覚え、月に4~5回の当直で実践してもらおうほうが良いと考えたからです」と、言うのは麻酔科の足立健彦部長だ。

救急での取り組みをサポートするため病院は「救急講義」という研修医向けのカンファレンスを今年1月から開始した。「これまで当院に研修に来る者は大学病院で1年ないし2年研修した医師でした。必修化になり学卒ですぐに入ってくるようになり、基本的な部分からレクチャーする必要性を感じた」と、足立部長は話す。さらに5月からはより基本的なことを教える「コアレクチャー」も開始した。ここでは細菌の染色の仕方や腹部エコーの撮り方といった手技について、専門科の医師からの指導を行う。

「古くから公募で研修医を採用してきた病院と比べると、基礎的な部分の教

育体制は確かに弱かった。研修は各科任せといった部分もこれまでは見られたが研修管理委員会の色々な取り組みにより徐々に指導医の意識も変わってきた」と、越山部長は語る。

内科は、呼吸器、糖尿病、消化器、循環器の4科をローテートし、血液、神経、免疫、腎臓については内科の研修中には回らないプログラムになっている。症例として頻度の高いものを集中的に学ぶ体制を採用した。研修医も、「2年間で内科研修は6ヵ月しかない。その中で効果的な研修をするためには、発症頻度から考えて、呼吸器、糖尿病、消化器、循環器という内科ローテーションは妥当だと思う」と話す。その上で、「後期研修のプログラムを選ぶ際には経験できなかった腎臓、免疫、血液、神経などを学び、その上で自分の進みたい科の研修を受けたい」と話す。

後期研修に対する考え方の差異 セミローテートの研修を模索

その後期研修については、研修委員会で検討の真っ最中。「病院としては早く専門科を決めてもらいたいのですが、

研修医は「いきなり専門科だけではなく、初期研修で回れなかった科も経験したい」という要望が多く、そのあたりの整合性を研修管理委員会で話し合っています」と越山部長は話す。北野病院の研修の持ち味は専門医の育成、特に内科の各科は豊富な症例経験を利用してレベルの高い内科医を送り出してきた。スーパーローテート研修になり、その持ち味が活かせなくなっていることが病院にとっても研修医にとっても歯がゆい面がある。

その上で、「いずれは研修医のキャリアデザインに合ったコースも作り、「将来は開業したい」、「腎臓内科の専門医として活躍したい」、「大学に戻って研究の道に進みたい」といった研修医の志望に沿ったコースを大学と協力して構築すべきかもしれない」と、越山部長はつけ加える。

各科のレベルが平均して高く、特に専門医教育に秀でた北野病院の研修、自らの研修の持ち味を活かした後期研修をどう形にしていけるか、院内からだけでなく、全国の研修医が注目するところだろう。

研修医の声

菊池 理 医師

(初期研修2年目 京都大学出身)



辻 なつき 医師

(初期研修1年目 和歌山県立医科大学出身)



「一つの科である程度の期間、研修できる病院が希望でした」と菊池医師は北野病院での研修を決めた理由の一つを語る。「スーパーローテート研修で複数の科を回る、さらに内科6ヵ月の期間で7つも8つも専門科を回る研修病院では学生のポリクリ以上のものができると思いませんでした。ここは内科6ヵ月の期間で呼吸器、糖尿病、消化器、循環器の4科に絞って研修するプログラムを組んでいました。もちろん絞り込むことで経験できない診療科もあるのですが、制約のある中で有意義な研修をするためには仕方ないだろうと考えました。」(菊池医師)。

辻なつき医師は、「将来、産婦人科に進む」という前提で研修病院を探した。「実は、無理やり決めた志望科です。将来、何科に進むのが決めたほうが病院選びの判断軸が明確になるからです」(辻医師)。お産だけではなく、悪性腫瘍や生殖医療もやっている病院を見学し、北野病院を選んだ。

「ですが、婦人科しか診られない医師にはなりたくありませんでした。内科疾患も救急も外科もわかった上で産婦人科診療のできる医師が求められている。だからこそ厚生労働省は私たちにスーパーローテート研修を課したのだらうと思っています」と辻医師。

研修に入って2ヵ月目、今は救急外来を担当している。「患者さんの症状を見て、聞いて、検査のオーダーを考えて、とても勉強になります

すが、まだ研修2ヵ月目なので実際は苦しい。いくつかの診療科を経験した後に回りたかったというのが正直な感想です」(辻医師)。

研修医の救急での活動をサポートするため、病院は「救急講義」を開始した。「これは研修医から救急で困ることがあるので講義をして欲しいと要望してできたものです。基本的に各科の講義、カンファレンスなどがあるのでそこで実地に即した知識を学び、足りない部分は自分でやれば良いというのが大前提だと思います」(菊池医師)。

「自由度が高いということは全部自分にふりかかってくる。サボることもできますが、サボればどんどん自分がダメになる。だから自分で自主的に学ぼうと思う。今は、これまでの研修を振り返って、弱いところを集中的に学んでいます。これも自分自身で決めた取り組みです」と菊池医師。

必修化臨床研修、スーパーローテートの長所を最大限に活かしながら、足りない部分は自分たちの力で補強していくという姿勢が、北野病院での研修の姿なのだろう。